

午前の部——座長講評

松水征夫（広島大学経済学部教授）

それでは順番にということで、午前の部を担当いたしました私の方から2つのご報告に対する若干の感想なりコメントなり、あるいは私自身の考え方を述べさせていただきたいと思います。

昨日井上先生に「都市計画と地域経済」ということでお話いただきまして、その後で「都市づくりと地域経済」と題するパネル討論をやっていただいたわけではありますが、昨日の議論は都市づくりのあり方についての総論的な議論であったかと思えます。本日の議論は午前・午後、ともに都市づくりの各論的な具体的な取り組み、及び現状における問題点のご指摘であったかというふうに思えます。都市づくりということになりますと、どうしても計画ということが必要になるわけでございますけれど、昨日、井上先生は基調講演の中で計画のためにはいろんなレベルがあるということで、コスモ計画から始まりまして、グローバル計画、国土計画までおりてこられまして、さらに地域の計画、都市計画あるいは都市の中の地区の計画、敷地の計画というように、非常に細かいレベルまでの計画があるということをお話になりました。こういった計画のレベルということになりますと、午前の部の紙屋町地下街の問題というのは、地区の計画ということになるかと思えます。地区の計画を考えるという意味ではやはり都市計画がどうなっているかということが重要になると思えます。さらに2番目の瀬戸大橋の架橋に関わる問題は、地域計画の問題になるかと思えますけれど、地域計画の場合には国土計画との関係で、問題点が考えられる必要があるかと思えます。

昨日から色々でおりますように、国土計画の基本としましては現在四全総があります。そのなかでは東京一極集中を是正するための多極分散型国土の形成ということがうたわれているわけですが、当中国・四国地域がどういった方向に向かうかという具体的な指針は示されていないということで、具体的に将来どういう方向に向かうかは当地域で考えないといけないということになっています。そういう意味では昨日からいろいろご議論があったところでございますけれど、要するにどのようなものをこの地区で構想するかということが最終的には重要になるのではないかと思います。これからますます都市間競争が激しくなることが予想されるわけですが、生き残りのためにどのような構想ができるかということが最後には重要なことになるのではないかと思います。地域経済研究センターもいろんな構想づくりにいろいろ提言なされているわけですが、私自身はまだそういう提言をするまでの力がございませんのでいろいろ勉強させていただいている状況であります。午前の部のご報告に関して私自身の感じた

ことをお話させていただきたいと思います。

まず最初のひろぎん経済研究所の藤田さんのご報告でございますけれど、「紙屋町地下街構想をめぐって」ということで構想をまとめられたひろぎん経済研究所で中心的に調査研究を担当された方の報告ということで、非常に生々しいご報告でした。紙屋町の地下街建設については、現在前向きに進められているとはいえますものの、その実現の可能性が固まったわけではございません。新交通システムの工事が現在なされておまして、地下道の建設も進められていますので、なかにはもう地下街の建設も当然始まっているんだというふうにお思いの方もあっていいのではないかと思っておりますけれど、現在のところまだ地下街の建設というのは決定がなされておられません。地下道の建設につきましては、あくまでアジア競技大会に間に合うように新交通システムを作り、その上に地下道を作るということで交通を夜間はストップさせて急ピッチの工事が進んでいるわけがあります。しかしながら地盤が軟弱なうえに都心部の要所での工事ということで非常に難工事が予想されているわけでありまして。地下街の建設ということになりますとさらに難しい状況にあるということはお理解いただきたいと思います。しかしながら、地元の民間企業のご熱意によっていろんな当局との折衝が現在続いておりますのでございます。現在地下道の計画で進んでおりますので、将来これを地下街に変更するためには設計変更が必要になってまいります。これまでの工事の進捗状況からいたしますと、一刻も早く地下街の建設・運営母体としての第3セクターの設立が必要になってくるわけでありまして。いくら民間が一生懸命になりましても第3セクターができなければ地下街建設の計画は進展しないわけでございます。現在第3セクターの設立に向けて民間組織の受け皿はすでに作られているわけですが、最終的に広島市の参加が必要になるということで広島市に積極的な出資をお願いされているところであります。広島市の方も前向きに検討していただいているわけでありまして、市の出資金額をどうするかという問題あるいは地下街の規模をどの程度にするかという問題でまだ若干の問題が残っているということで、第3セクターを作るまでにいたっていないというのが現状のようです。

昨日のパネル討論でも若い人々が集まってくるような魅力ある都市づくりの必要性があるという主張があったわけでございますけれど、地下街の建設というのは、広島市の魅力ある都心づくりの目玉になるというふうに私自身も考えております。しかしながら地下街というのは一度建設をいたしますと後で変更ができませんので、やはりこの際国家100年の計ではございませんけれど広島市の都市づくりの50年後、100年後の未来の発展の夢を考えるというような感覚から検討されるべきではないかと思っております。昨日井上先生の基調講演の最初にも広島市の100メートル道路の建設をめぐっての議論が紹介されたわけでありまして、100メートル道路が建設される際にもその是非をめぐって議論があったというお話がありましたが、現在では100メートル道路の持っている意味あいというのは皆さんご承知の通りでございます。地下街の建設というものもある意味では将来の広島市の発展を占う重要な曲がり角に来ているような気がいたします。せっかく民

間でこれだけ盛り上がっていますが、もし実現しないということがありますと、非常に将来悔いが残るような状況になるのではないかと思います。とは言っても今朝ほどのご報告にありましたように、地下街をつくるためには400億か500億ぐらいの建設費用がかかるということでございますので、採算性というのが非常に重要視されるのではないかと思います。採算を考えていく場合には、どの程度の規模になるかという問題もあるわけですが、そういう難しい面がいろいろあるというのはよくわかるわけですが、せっかくこれだけいろんな機関で検討されているという状況から考えましても、広島市の方にはできましたら長期的な視点から都市づくりの基礎をつくるという意味でこの際、地域経済の活性化にも役立つということで英断を期待したいと私自身思っております。昨日のパネル討論でも門田先生の方からご発言がありましたけれど、都市づくりはタイムリーに時宜を得た進め方をしないと後で悔いが残るというお話がありました。地下街の建設をめぐる現在建設するかどうかで決定をすべき時期にきているわけですが、そういう意味では今非常に重要な段階に来ているように思われます。

広島市の今後の都市づくりを考えるという観点からいいますと、例えば新交通システムが現在つくられているわけですが、将来的にはこの新交通システムをどのように伸ばしていくかという問題が当然出てくるかと思います。すなわちアジア競技大会に向けていろんなプロジェクトが現在進んでいるわけですが、アジア競技大会後のプロジェクトの問題が広島市にとっては非常に重要な問題になってくるわけがあります。聞くところによりますと、新交通システムは現在本通まででストップしていますが、将来的にはどういう形になるかはわかりませんが、宇品まで伸びるといふふうに聞いております。またアジア競技大会会場から己斐まで延長され、さらに己斐方面から広島駅方面まで、いわゆる東西線の地下鉄等が構想されるということでα型の軌道交通体系というのが色々ところで検討されているようであります。宇品から本通、それにアジア競技大会会場、己斐、広島駅ということになると、確かにαになるわけですが、私としては宇品と広島駅を結べば数字の8の字型のなるわけでございます。そうすれば、環状線にもなるということで、少し夢物語みたいな気がしますが、ぜひとも実現していただきたいと思っております。東京、大阪は交通の便利が非常によいわけですが、それは環状線というのが非常に生きてきているわけでございます。当地域の場合交通問題というのがいろんな地域開発のネックになっているわけですが、この際8の字型の環状線を作っていただいたらという気がいたします。もし8の字型の環状線ができたとすれば交通の結節点として、例えば広島駅でありますとか、八丁堀でありますとか、紙屋町、あるいは西広島駅といえますか、己斐の辺りに何らかの地下街が必要になってくるんじゃないかという気がいたします。昨年9月に広島商工会議所の中に「地下空間利用特別委員会」というのが設置されたわけですが、そこで現在当地域の地下街、あるいは地下空間の利用について色々検討

が進められているようであります。聞くところによると、近々報告書が出るようでございますが、広島駅とか、八丁堀、紙屋町に、それぞれ地下街が必要かどうかという議論がなされているようであります。特に紙屋町というのは特別に重要な、最重要整備地区として位置づけられているというようにも聞いております。紙屋町地下街の建設構想の策定・検討に私自身、若干足をつっこんでいるという事もある、少し好意的にながめているかもしれませんが、やはり長期的な観点から考えると、この際英断が待たれているのではないかという気がいたします。

つぎに、2番目の「瀬戸大橋架橋と都市機能の変化」と題する岡山経済研究所の渡辺さんのご報告でございますが、岡山経済研究所の方では瀬戸大橋の開通に伴ってその後どういう影響が現れたかということで、岡山経済研究所が発行されております、『岡山経済』という機関誌に1989年の1月から5月まで4回にわたって調査報告を既に刊行されております。ご覧になった方もおありかと思えますけれど、非常に詳しい調査をしておられます。本日の調査は、そういう従来の調査報告に加えて、最近行われた岡山県内に事業所を持つ企業の営業活動に関するアンケート調査をふまえられまして、県外企業が県内における営業所を増やす傾向にあるということや、営業所から支店あるいは支社に格上げされる場所が出てきているということ、あるいは営業エリアが拡大しているというふうなお話があったわけでありまして、すなわち商圈とか経済圏の拡大がみられるといったご指摘があったわけでありまして。

本日の報告は、岡山側からみた瀬戸大橋の架橋効果という事であったかと思えますけれど、実はこの地域経済研究センターの昨年の経済セミナーで香川大学の井原先生から四国側からみた瀬戸大橋の架橋効果の調査報告がございます。架橋効果は、大体岡山側からみた場合も四国側からみた場合も大体似たような状況になっているような気がいたします。すなわち、四国と中国地域の一体化が進み、特に通勤・通学圏、あるいは買い物等の生活行動の面に関してはかなり一体化が進んでいるということが明らかになっていることがうかがえます。ただ企業行動の変化につきましてはまだ橋が開通して3年ということで、具体的に余り顕著な動きが出ていないように思われますけれど、その中でも若干商圈、経済圏の変化がみられるというような報告を今日はしていただいたように受け取りました。ただ先程座長をしている時にも私自身若干申しましたように短期的・中期的にはそういう望ましい効果が出ているわけでありまして、長期的にみまると、瀬戸内海に三本橋が架かるわけでありまして。最終的にどのような状況が当地域の場合訪れるのかということは当然考えないといけないように思います。短期的には確かに人の流れ、物の流れ、お金の流れが変わるわけでありまして、それを踏まえて企業の行動は変化いたします。それにともなって長期的には商業構造が変わってまいりまして、地域社会の経済変化が起こるわけでありまして、人口の変化が起こり、また経済圏域の変化が起こることが当然予想されるわけでありまして。

三本橋が架かった時点での瀬戸大橋の役割等を考える際には、やはり長期的な観点か

ら瀬戸大橋の架橋効果を考えて、広域的に当地域が何を機能分担すべきかということを考えるべきだと思います。将来中四国の経済圏の再編成というのが当然起こる事になるかと思いますが、都市づくり、あるいは都市機能の強化というのはそれを踏まえた上でやっていかないといけないのではないかと思います。渡辺さんのご報告の中でも例えば機能分担という事で、岡山の場合には文化都市、あるいは医療都市としての機能を強めていったらどうか、広島の場合には国際交流を強めていったらどうか、というような提言もあったわけですが、私自身は確かにそういう面はあるかと思いますが、長期的に考えますと国際交流という面になりますと、東京や関西の地位がどんどん上昇していきますと、成田空港なり関西新空港は世界の玄関としての役割を果たすことになるのではないかと思います。また、福岡の場合はアジアを睨んでいるわけでございます。広島が国際化を目指すという事は確かに良いわけでございますけれども、東京、関西、あるいは福岡との比較で言いますと、はたして10年後も国際化ばかりを言っておられるのかなというような気もしているわけでありまして。そういう意味では、先程お話がありましたような当地域、瀬戸内海地域は気候が温暖ですし、海もまだ汚染はされておりますけれども、大分きれいになってきましたので、海を活かした、あるいは自然を生かした方向で行くべきだと思います。例えばこれは私見でございますけれども、東京とか関西、あるいは福岡で世界の人々を迎え、その奥座敷といいますか、世界から人を迎えて厚くもてなす場所に当地域はなつた方がよいのではないかと思います。リゾート開発は色々問題があるようでございますけれども、リゾートとかレジャーとかそういう基地として生き残る方向も考えられるのではないかと思います。そういう意味では午前中もちょっと出てきましたけれども、チボリ公園なんかはもう少し前進していただきたいというような気がいたします。香川ではレオマワールドというのがかなり人気を集めているようですが、やはり全国から人を呼べる、あるいは世界から人を呼べるような何らかの施設を持った地域として生き残っていく必要もあるのではないかと思います。また、海を活かした施設ということであれば例えばサンディエゴにありますシーワールドのようなものを作っていく必要もあるのではないかと思います。しかしすでに日本のどこかの地域で確かシーワールドを作るといふような計画も聞いた事がありますので、どこの地域にも負けないような海を活かした施設でなければならないと思います。

これから都市間競争が激しくなる中で当地域としてもやはり他の地域に負けないようにするためには、やはり構想力が重要になってくるのではないかと思います。中国地域の各シンクタンクでも色々お考えになっているようでございますけれども、我々もどうすべきかをもう少し考えていく必要があるのではないかと思います。最後に余計な事をつけ加えましたけれども、一応午前の部の講評ということに代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

午後の部——座長講評

香川 敏 幸 (慶應義塾大学総合政策学部教授)

香川でございます。本日の午後の研究報告、三本ございました。その座長を務めさせていただきましたが、この広島大学地域経済研究センターの研究集会第3回目ということで、とりわけ2日目にはそれぞれの地域を代表する民間の研究機関からご報告をいただくということが恒例になっております。本年3回目で私の率直な印象はますます民間の研究機関のそれぞれ持ち味を十分発揮されて、非常に個性的な研究、また調査、報告がうかがえたというふうに変感銘を受けました。午前中につきましては松水先生の方からただ今総括ございましたように、都市づくりの中でもとりわけ基盤に関わるような大型のプロジェクトに関するご報告がございました。午後の研究報告はどちらかと申しますと、むしろ非常にみじかな文化ですとか、伝統工芸品といったような分野、或いは、これは決して小さなというわけではございませんが、わが国全体が抱える問題としての住宅問題、そしてその中でも地方中枢都市広島住宅問題という点で大変量感のあふれる研究報告をお聞きしたわけでございます。またそれぞれにつきましてコメントないし質問をしていただきました討論者の方々も非常に的確なコメントをしていただきました。そういう意味では聴衆者の皆さん方、私も座長として聞かせていただきまして非常に分かりやすかったように思います。何が論点であるのかというようなことが非常にはっきりしたように思います。そういう点で特に本日の研究集会の意味があったのではないかと喜んでおります。とりわけ私は現在東京の方に移っておりまして久しぶりに広島にお邪魔した訳でございますが、意義のある研究報告があったと思っております。

共通のテーマが「都市づくりと経済」というような大変大きなテーマでございますが、それをどのように各個別の問題に引きつけていくかは、やはりそれぞれのお立場なり、得意の分野ということもございますのでそういう意味では三つの報告はそれぞれ特徴のある報告でした。しかも共通のテーマから見事にテーマを取り入れた形で報告しておられると感じたわけです。この都市づくり、これはいわば地域づくりということにつながるわけでございますが、もちろん都市という一つの大きな機能、例えば都市と農村あるいは都市でもいろいろな都市がある。東京や大都市圏を中心とするような地域もあれば、この地方中枢都市というような都市もある、あるいは中核都市があり、また一定の規模をもった都市があるわけでございます。それぞれがまたその地域においては非常に重要な機能を果たしているわけでございますが、ここで私は都市づくりというのは、何のための都市づくりなのか、あるいはこれはもう少し言えば誰のための都市づくりなのか、それが誰によって行われるのかといったようなことで考えていくと本日の三つのご報告というのが非常に生きてくるのではないだろうかと感じております。人が生活し住むと

いうこと、これは我々の社会にとって基本的なところでございまして、しかし人が住みそこで生活をしていくということは非常に総合的なものでございます。いろんな生活の場なり側面というものがあるのでございまして、それぞれにまた必要な機能というものが要求されるわけでございますが、その意味では非常に多面的であり総合的である。人の生活には非常に多面的な面があるんだということは申すまでもないわけでございます。そういう中で確かに経済というものも非常に重要な一つの側面でございますけれども、わが国は幸いにして大変豊かになってまいりました。従いまして、この豊かさというものがまさによくいわれますように実感できるということが要求されてるわけでございますし、また豊かさの捉え方も非常に多様でございます。これは地域によりましてまた世代によりまして捉え方が異なるようでございます。昨日私どものキャンパスでこれは藤沢市にございますけれども、この藤沢市に支社ですとか営業所あるいは工場を持っておられます企業の方々あるいは地元の行政の方々にお集まりいただきましてセミナーを毎週木曜日にやっているわけでございますが、昨日そこでの話題として出でてまいりましたのは豊かさの捉え方において非常に世代間で差がある。特に若い人たちのこの豊かさの捉え方がとりわけ団塊の世代よりも上の世代と大きな開きがあるということが話題になりました。とりわけ若い人々はもう既に豊かさといえますか豊かであるということについては当たり前のように空気のごとく受けとめている。尚我々といえますか、団塊以上の世代になりますとまだ豊かさを追求していかなきゃならないという非常に緊張感を持ち現実感をもちながら生活している。そういうところでは若者はむしろそうではないと、豊かさを我々はある程度実現してるんだという前提の上で、したがってそこには我々以上の世代になりますと、あれかこれかと選択の問題が重要になってまいります。したがってこれは効率ということを考えて選択をしなければならないということになってまいります。従いまして政策あるいは施策を考える上でも評価基準を設けて、その評価基準に従って効率のいい施策を打ち出していくところいう方式になってくるわけでございますけれども、この若い世代になりますとそういう考え方をとらないということがいわれております。それはどういうことかといえますと、あれもこれもということになってくるわけで、もちろんこれはなかなか本来は難しいことであって我々の時間一日に24時間という中には限りがあるわけでございますから、あれもこれもといかないはずですけども若い人々の受けとめ方はそうではなくて、そういう非常に限られた中でもあれもこれもというそういう考え方をするんだということになってまいりますと今までのような評価基準、即ち効率がいいことをもって様々な施策を考え、あるいはいろんな問題を考えていくということが根本的に変わってまいります。とりわけ本日ご報告いただきました中の分野といたしまして地域文化創造の問題と申しますか地域文化のあり方でありますとか、あるいは伝統工芸品の問題、それからまた非常に公共性が高いといわれております土地やまた住宅の問題、これらは必ずしも従来のような効率という基準でもって評価できない問題ではないかということになるわけでございます。このあたり

は、例えばもうすでにおやめになりましたけれども、熊本県の前の知事でいらっしゃいました細川さんが出雲市の市長の岩国さんとお書きになりました『鄙の論理』という本がございますが、この中でも実はそういうことに触れております。既に皆さん方もお読みになったと思いますが、大変個性のあるこのお二人が10の項目といたしますか、10章にわたってその所信を述べておられるわけですし、また行政の経験を展開しておられますが、まさにその中でもこの地域づくりというものについて例えばそれは緑とか木とかいったような日本伝統の文化というものに根ざしたものを中心に考えていく、あるいは地域をデザインするという、デザインというものをまさに効率で考えるのではなくて、やはりそこには快適さでありますとかあるいはその文化的な価値そういう我々にとっては違った価値というものを追求する場として地域をつくったり、あるいは都市をつくったりということについて心をくだかれた、そういう姿がそこから伺い知れるわけでございます。また具体的に述べておられます。こういう様なことを考えてまいりますと鄙の論理、これはまさにそのひなと田舎ということを率直に言っているわけですし、むしろそれぞれの地域というものを非常に誇りに思い、それを基盤にしながら地域づくりをしていくという姿勢を強く打ち出していくわけです。その中でも、ちょっと先ほど座長を務めさせていただきましてとき申し上げましたように、岩国さんの「神話の国に木の文化を咲かせる」の中に一村一品ではなくて多村一品であるというようなくだりがございます。これはいわば農業におけるネットワークの問題であります。農業もそういう意味では効率という観点とは別の基準で考えなければならない産業でもある。もちろん農業も産業として考えていかなければならない。営農がしっかり行われなければ困ると我々も思うわけでございますけれども、これはまた非常に地域に根ざした伝統的な文化とも関係する産業でもある。そういう点では本日のご報告の中でも伝統工芸品といったようなもの、これを地場産業として捉える、それをいかに活用していくかということについてのご提言もあったわけでございまして、こういうこの文化、地域文化を創造していく、あるいは伝統的な工芸品などを維持し、それをさらに現代に活かしていくとこういうことは決して従来の我々の評価判断であります効率ということとは少し違った次元になってまいります。もちろんその基盤にはやはり効率を基盤としていかなければならないという問題があるようにも思いますが、しかしながら我々の価値というものにはもう少し違った次元の価値も含まれるわけでございまして、そういう意味では都市づくりという場合にはこの効率を中心とするようなそういう都市づくりも一方で考えなければならないと同時に他方ではやはりそこに潤いとかゆとりですとか、また違った価値をもつもの、我々にはその真善美というこの価値がございます。これはどこにいてもあるいは地域をこえてあるいは普遍的に私たちは美しいものは美しいと思ひ、また素晴らしいと思ひ思うものはまた素晴らしいと思ひ思うものがやはりあるわけでございます。これは先ほどの山口県の伝統工芸品等は私たちがそれを見れば非常に感動するわけでございます。これはかなり等しく感動を覚えるという点で非常に価値のあるものであるわけです。しか

しながらそれがマーケティング等の問題、販路の問題等で十分に伸びていかない、需要が伸びないといった問題に直面する、これはもはや従来の効率といった観点での評価では解決できない問題、そういう意味では非常に総合的な観点に立った、また新しい評価基準といったものを私たちが尺度としてもって、もちろん我々、1日24時間といういわゆる時計をもっているわけですが、そのリズム自体も非常にまた人によっては違うわけですが、そういう意味では価値の持ち方、切り口というものをいろいろな角度から捉える多面的であり総合的にやる必要があるということを今回この三つのご報告から私は学ばせていただいたように思っております。最後の住宅問題、あるいは土地問題これは大変わが国の重要な課題でございますけれども、これも一つの居住空間、居住環境というものの快適さ、いわゆるアメニティ等追求していくとなりますと当然どこかでこの評価基準、従来私たちが一番重視した基準であります効率の問題とは必ずしも違った次元で考えなければならないということにもなっております。そういう意味で豊かさというものを都市づくりの中で今後私たちがどう考えといくかあるいはどうこの地域経済との関係で従来地域経済の活性化ということになれば、当然産業を中心として考えていかなければならないということになるわけですが、それを乗り越えてと申しますか、いろんなかたちで潤いのある別の価値を見出すことによって再びこの地域経済における活性化もはかれる、そんなことを私たちは考えていかなければならない段階にきているのかなという感じが致します。都市というものの、これをいろいろ連携であるいはネットワークでというご議論も本日ございました。確かにそういう意味でネットワークが大切でございます。交流というのも大切でございます。ただ交流やネットワークというものが従来の例えば組織の概念で申しますと、ピラミッド型の何かネットワークであったり交流であったりというようなことをとかく考えがちです。効率の観点からいうときには、このようなピラミッド型の組織で申しますと非常に官僚的な組織、これが従来は効率的であると考えられてきたわけでございます。しかしながらどうも昨今のネットワークなり交流の作り方というものは従来のようなそういう作り方ではどうもうまくないのではないかという感じがするわけでございます。また世代の問題、高齢化社会という中で若者も一方でそれに対していろいろ悩みをもつわけですが、若者と高齢者というものの世代間の交流と申しますか、そういうものも進めていかなければならないという具合に、例えばそれは高齢者の非常に経験豊かなあるいは従来の人間の知恵、日本人の知恵といったようなそういうものをもってあるいは技能、あるいはここでいう伝統的な工芸品の中に高い優れた日本のな技能を蓄積しているのがそういうものを今度は若い世代にいかにかに受け継ぐかという問題にもつながっております。都市づくり地域づくり町づくりは同時に人づくりであるという面もこの三つのご報告の中に部分的に出てきたようにも思うわけです。そういった非常に総合的なことを考える、あるいは多面的な面で考える上で今回の定期報告会、私も非常に意義深く伺わせていただきました。私は今勤務いたしておりますのが藤沢市という約35万ほどの人口規模でござ

いまして、神奈川県の中央と申しますか、都心から申しますと50キロ圏というところに位置する都市でございます。ここと私の自宅は町田市という同じく30数万人の規模をもっております都市に住んでおる。そういう生活の場と勤務地とほぼ同じくらいの都市規模でございます。そういう中でやはり都市にはそれぞれ個性があるなという感じが致しまして、私は町田市というところからいくつかの市を通過いたしましてこの藤沢市という勤務地までまいります。具体的に申し上げますと、相模原市というのが隣接をしております、それからそれに続いて座間市というところを通過いたします。ここは基地があったりするところでございます。そして綾瀬市という町がございます。そして海老名市というのにちょっと引っかけまして、厚木市という大きな市に隣接した市でございます。そして藤沢市という、この首都圏でも実はこれだけの沢山の市を私は通過を致しまして勤務をしているわけでございますが、それぞれにやはり町のたたずまいなり機能というものには個性がございます。従ってやはり松水先生がおっしゃったように競争の時代とおっしゃいましたけれど、個性というものも確かに大切でございますが、どうもその個性を強調いたしますと、これも少し違った観点から申しますと最近の若者はむしろ個性というものをあまり主張しないといえますか、強調しない。それでなくてもある意味で個性的なんですね。従って個性を強調することはかえって個性がないから強調することになるわけでありまして、もう個性とか何とかって時代じゃなくなっていく。それが当たり前のようになって、むしろ調和させていく、あるいは共振という言葉が使われるようになりますが、共に振動するといえますか、きょうしんですね、そういったような感覚にもなっているというような時代でございます。だいぶその辺が若者の感覚とは違ってまいりますしかしそれはこの高齢者とその辺りではかえって若者の方が高齢者と調和していくというようなことにはどうも優れてきているようでございまして、世代間の交流なりネットワークというものをこういうとりわけ文化活動でありますとかあるいは、伝統的な工芸品等をめぐる問題につきましてあるいは住宅問題も多分確かに今までのようには核家族を中心として住宅というものを考えてきていると思いますが、それが次第に多分崩れてきているんじゃないだろうか、一方で核家族が家族という伝統的な家族のあり方を守ろうとする傾向と、そうでなくそれを壊す傾向、例えば若い女性は最近ではむしろ仕事をしてなかなか結婚しないというような傾向も出てきているわけですね。従って、これもこれからの家族とかあるいは我々の基礎的な単位がどうなっていくのかといったこともこの住宅や土地問題は関連してまいります。そういった非常に大きな変化の動向の中で、この土地や住宅の問題、そして都市づくりも考えていかなければならないというようなところで何度も申しますが、従来のような価値観、価値基準というものによりまして十分それでは捉えきれない面が都市づくりというものにあるというふうな印象を私ももちまして、皆さん方どこまでそのことについて私の申しましたことにご賛同いただけるかどうか分かりませんが、座長としての印象をもちまして私の総括とさせていただきますたいと思います。今日は大変ありがとうございました。

あ　と　が　き

広島大学経済学部附属研究施設として地域経済研究センターが設置されて、3年余を経過しました。その間、同センターは“産・官・学の連携”と“地域の問題は地域で考える”をキャッチフレーズとして、地域経済の活性化策を多面的に模索されています。

地域経済研究センターは、専任教官が2名のため、これを補佐する研究員・客員研究員を学内及び学外から迎えられ、研究体制の強化・充実に留意しておられます。また、地域経済の調査・研究を行っている学外の諸機関との情報交換、共同研究、相互利用のネットワーク作りを目指して活発な活動を続けておられます。

地域経済研究推進協議会は、同センターと共催で研究集会、シンポジウム、セミナー、研究会等を精力的に開催しております。これらの活動での示唆に富んだ数多くの報告と熱心な討論を報告書として記録にとどめることは、大変意義深いことであり、地域経済の発展に貢献することになると期待されます。こうした観点から、地域経済研究推進協議会では、このたび同センターの協力のもとに、第3回研究集会の報告書を作成することにいたしました。本誌が、中国・四国地域の活性化に貢献するだけでなく、地域経済研究センターを中心とした地域経済研究機関の連携強化にも役立つことになれば幸いです。

大学と地域が一体となって当面する地域の諸問題に取り組むことで、さらに大きな成果をあげるために、地域経済研究センターと地域経済研究推進協議会の活動に対する忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸甚です。

最後に、本誌の作成にあたり、大変お世話になりました関係各位に深くお礼申しあげます。今後とも皆様方のご支援をよろしくお願い申し上げます。

地域経済研究推進協議会会長

中 島 正 雄 (中国经济連合会専務理事)

都市づくりと地域経済
第3回研究集会報告書

平成4年7月25日 印刷 (非売品)
平成4年7月30日 発行

編集 広島大学経済学部附属地域経済研究センター
発行 地域経済研究推進協議会
〒730 広島市中区小町4-33
中電ビル2号館
中国経済連合会気付
印刷所 中本総合印刷株式会社
〒732 広島市南区大州5-1-1
